

32. Pepsinogen I, II・RIA BEAD の胃小区 CR 像との対比検討

辰 吉光 小倉 康晴 延原美津子
 長谷川玲子 福万 千尋 石丸 徹郎
 清水 雅史 楢林 勇 (大阪医大・放)
 山崎 紘一 (箕面市民病院・放)

胃 X 線写真により診断された萎縮性胃炎患者と萎縮性変化を認めない人における Pepsinogen (PG) I, II 値および、萎縮性胃炎患者における萎縮の程度と PG 値との関係を比較検討した。胃 X 線像は胃小区が詳細に得られるように FCR を用いて行い、得られた写真により胃小区の大小不同、範囲などから、萎縮性変化を認めない (group 1)、強度の大小不同があり広範囲に描出されている (group 5) と五段階に分類した。PG 値は、UGI 施行直後に採血を行い、RIA BEAD KIT により測定した。PGI については萎縮性変化を認めない 6 人の平均値±標準偏差は 59.8 ± 23.9 (ng/ml) であった。group 2-4 においては 41.5 ± 24.4 (ng/ml) と萎縮性変化を認めない人より低値を示したが、group 5 においては 70.9 ± 12.6 (ng/ml) と高値を示した。また、全体的にばらつきが大きかった。PGII においては萎縮性変化を認めない 6 人の平均値±標準偏差は、 11.3 ± 9.02 (ng/ml) であった。PGII の値は萎縮性変化が進行するに従い、ゆっくり増加していく傾向がみられた。PGI/II においては萎縮性変化を認める group と認めない group の間には、萎縮性変化ありの group の有意な低下 ($p < 0.01$) を認めたが、萎縮性変化を認めた各 group 間においては有意な変化を認めることはできなかった。

33. Dipyridamole および運動負荷による心筋虚血の差異について——局所心筋灌流および局所心機能の定量解析を用いて——

外山 卓二 西村 恒彦 植原 敏勇
 下永田 剛 林田 孝平 広瀬 義晃
 神長 達郎 (国循セ・放診療部)
 伊藤 彰 野々木 宏 土師 一夫
 (同・心内)

【目的】Dipyridamole (Dp), 運動負荷 (Ex) 心筋シンチ (TI) で一過性欠損像域 (RD) の局所心筋灌流, 心機能を検討した。【対象】労作性狭心症例で全例に RD を

認め、Dp ファーストパス (FP) を行った 20 例 (A 群) と ExFP を行った 12 例 (B 群) である。それぞれに健康者 9 例, 8 例を対照とした。【方法】Dp 負荷は Dp (0.56 mg/kg/4 分) を静注, Ex 負荷は多段階漸増負荷とした。RD の初期摂取率 (in%), 後期摂取率 % (de%), 洗い出し率 (WR) を求め、続いて多結晶型ガンマカメラ (SIM400) による FP にて左室駆出分画 (EF), 局所駆出分画 (rEF) と局所早期 1/2 充満分画 (r1/2FF) を安静時 (res), 負荷時 (peak), 回復時 (rec) に求めた。局所の検討は RD の虚血部 (I) と対側の非虚血部 (NI) で検討した。【結果】1) A, B 群の RD の in% ($80 \pm 9\%$, $80 \pm 7\%$), de% ($92 \pm 7\%$, $93 \pm 7\%$), WR ($32 \pm 13\%$, $34 \pm 12\%$) に有意差はなかった。2) EF (res, peak, rec) および rEF (I) は B 群で ($60 \pm 10\%$, $51 \pm 10\%$, $63 \pm 12\%$), ($62 \pm 11\%$, $51 \pm 10\%$, $65 \pm 11\%$) peak に低下したのに対し, A 群では ($60 \pm 8\%$, $61 \pm 9\%$, $60 \pm 13\%$), ($62 \pm 10\%$, $65 \pm 11\%$, $66 \pm 11\%$) 有意に変化せず, また rEF (NI) は B 群で ($62 \pm 11\%$, $58 \pm 13\%$, $72 \pm 11\%$) rec で上昇したのに対し, A 群では ($62 \pm 9\%$, $69 \pm 11\%$, $68 \pm 11\%$) peak, rec で上昇した。3) r1/2FF は A 群で対照例が変化しなかったのに対し, (I) ($55 \pm 17\%$, $47 \pm 15\%$, $51 \pm 17\%$), (NI) ($53 \pm 16\%$, $45 \pm 14\%$, $50 \pm 18\%$) とも peak ($p < 0.01$), rec ($p < 0.05$) で低下した。【結語】1) 両群の局所心筋灌流に有意差はなかった。2) Ex 負荷に比し Dp 負荷は虚血部において局所収縮機能障害が軽微であり, 局所充満障害の検出に有用であることが推察された。

34. 肥大型心筋症の心筋虚血に対する Verapamil の効果

谷口 洋子 杉原 洋樹 大槻 克一
 馬本 郁男 中川 達哉 志賀 浩治
 中村 隆志 東 秋弘 河野 義雄
 中川 雅夫 (京府医大・二内)
 宮尾 賢爾 (京都第二赤病院・内)

【目的】運動負荷 TI 心筋シンチグラム (EX-TI) を用いて肥大型心筋症の心筋虚血に対する Verapamil の効果を検討した。【方法】EX-TI にて一過性心筋虚血を認めた肥大型心筋症 12 例を対象に、無投薬下で EX-TI を施行後、Verapamil 240 mg/日を経口投与し、平均 8.8 週後に EX-TI を再施行した。局所灌流低下の程度を視覚的に 4 段階に評価し、Defect score とした。さらに定量